
ロシア義理姉人妻と
その娘を孕ませろ！
母娘催眠調教
寝取られロシア妻
基本ＣＧ２４枚
本編117P総ページ数269P

登場人物

（名字は全員同じ「小坂」）



凛

水泳部所属
幼なじみの祐二とは
彼氏彼女の関係
おじさんのことは
「ゴリラぽいし目つきがキモい」
と思っている



ユーリヤ

ロシアから留学しそのまま結婚
主人公の義理の姉
主人公とは元クラスメイトで
夫と出会わせてくれた親友と思っている



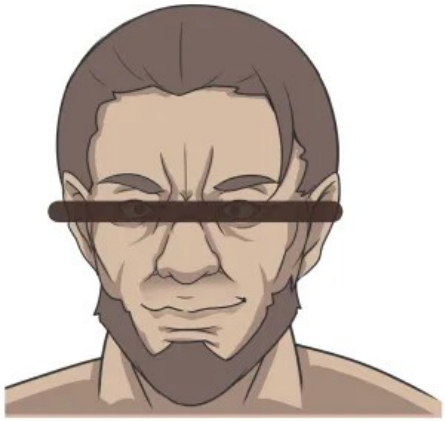
兄貴

ユーリヤと結婚し
娘（凛）を授かる
真面目な性格



祐二

主人公の息子
父親とはあまり話さない
ユーリヤは初恋の人で
今でも気になる



主人公

ユーリヤを手に入れるために
催眠を研究し遂に実行に移す
兄貴とは全然似ていない

どこからか声が聞こえる

夫以外との性行為は？


「以前、満員電車に乗ったとき、
痴漢に…体を…
触られました…」
「見知らぬ男に
体を玩ばれたということだね
君は興奮した？」
私は目を閉じたまま、首を横に振る

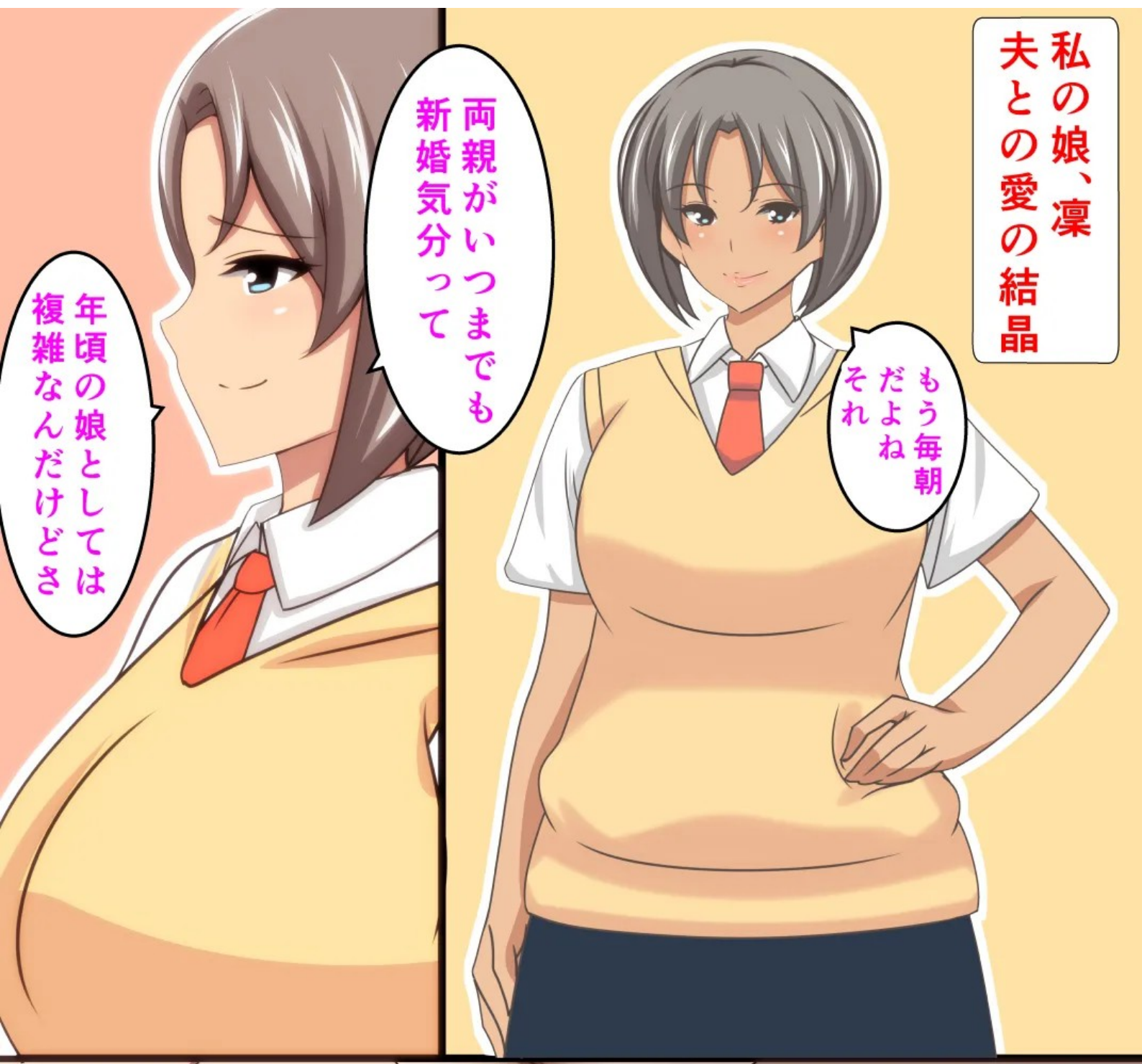

「これは懺悔だから
言えば楽になる
もう一度聞くよ」
「好きでも無い男に
体を玩ばれて興奮した？
君の愛しい夫よりも感じた？」
「…はい」


「服の上から胸を強く揉みしだかれて…ペニスを…私の性器に…擦りつけてきました」
「違うだろう？」
以前教えられたとおりに言わないと…
「…はい、チンポを私のオマンコに擦りつけてきました」
もみ
もみ
ぎゅっ
くちっ♡
くちゃ♡


「身をよじって抵抗していると
手がスカートの中に潜り込んできて…
手でチンポをクリトリスに
擦りつけられました
何度も…何度も…」
「その時、イッたんだね？」
「はい…」
イヤァ
アッ
イヤン
むにゅ
むにっ
くちゅ
くちっ
シコ
シコ


「そのまま犯された？」
「いえ…レイプはされませんでした」
「駅のトイレで、精液を拭き取ってオナニーしました…」
「その時のオナニーが気持ちよくて…」
「夫に後ろめたい気持ちがあります…罪悪感を…感じていました」
ビクッ
アッ
ビクン
むにゅ
むに
くちゅ
ピュッ


あんな夢
きっとすぐ忘れるわ
うん、ネクタイよし♪
ステキよあなた♪
今日も
一日頑張って！
いってらっしゃい
気をつけてね
ちゅっ♡
愛してるっ
もう、朝から
見せつけないでよ


私の娘、凛
夫との愛の結晶
もう毎朝
だよね
それ
両親がいつまでも
新婚気分って
年頃の娘としては
複雑なんだけどさ


私の大切な家族…
ずっと続く
私の幸せな日常


ほーんと
いつまでも
仲いいんだよね
あの二人
叔母さん美人だし
昔っから
変わらないよな
いいよなー
叔父さん羨ましい
もう～
彼女の前で
母親褒めないでよ
ははっ
俺には凛が
一番だって
私達も…さ
きゃっ♡
おいおい
朝から
恥ずかしいだろ
いいじゃん～♪
見せつけ
ちゃおうっ


義姉さん、兄貴元気になってきたな
この間はありがとう
おかげであの人も表情明るくなったわ
にこっ
生真面目な兄貴は
仕事で潰れる寸前までいった
俺は兄貴の会社のオーナーとは個人的に懇意にしている
仕事での便宜を図って貰ったのだ


まぁ元々、過度な重圧加えるよう仕組んだのだが
そういうワケで義姉さんは俺に感謝してくれている
兄貴はこのことを知らない
コネを使ったりするのが嫌いな真面目君だからだ
二人の秘密が出来たことで、かつての親密さを取り戻した気がする
ユーリヤ、君のためならそれくらい簡単だ
…そう呼ばれるのも久しぶり
あなたはいつも私達を助けてくれる
ありがとう
ユーリヤの笑顔を見る度に
俺の中に暗い感情が溜まっていく


兄貴と結婚する前は、彼女は俺とクラスメイトだった
彼女に一目惚れした俺は
留学生でこの国に慣れない彼女のために奔走した
それを横からしゃしゃり出てきた兄貴に奪われた
彼女も兄貴も俺の気持ちを知っていたはずなのに
俺はずっと、そのことを恨んでいた
彼女と兄貴は俺を裏切ったのだと
自分の息子と彼女の娘が
仲が良いのも正直気にくわない
さて、そろそろだな


ユーリヤの表情が消える
お茶請けに持ってきた菓子に仕込んだ薬物
ここ一月で、彼女に何度も摂取させ、暗示を幾度もかけた
今では催眠状態にするのは容易い
何年も前から独自に培ってきた技術
この技術で、何人も女を堕とした
兄貴の会社のオーナーには女学生をあてがっているのだ
その経験からわかっていることがある
そろそろユーリヤの仕上げができる頃合いだと
罪悪感を快楽に結びつけるのだ


「さぁ、あなたの
全てをさらけだしてください」
また…あの声だ…


どうしてもこの声に
抗うことが出来ない
なぜならこの声は
自分自身への問いだから
着ているものを脱ぎ捨てていく
「夫との性行為に不満は？」


愛する夫との月に2、3度の性行為
それもすぐに終わってしまう
もっと愛し合いたいと願っても
繋がった途端、夫は果ててしまう
それでも若い頃は
幾度も交わることができた
でも近頃はひとたび果てれば
疲れ切って眠ってしまう
「そんな夫を愛おしいと思う反面
物足りなさを感じて…しまいます」
たぷんっ


「はい…本当は毎日でも抱いて欲しい…ここ数年性欲が増している気が…します」
（コレ…キモチイイ…）
「物足りないというのは？自慰をすることがある？」
「はぁ…はぁ…はい夫とのセックスの後オナニーをしてしまいます」
「夫の寝ている横で？」
「ん…そんなこと…できない飲み物を取りに行くフリをしたりシャワーを浴びたりしながら…』
ハァ…
ハァ…
もみゅ
もみゅ


「夫を偽ってきたというわけですね」
「本当のアナタは痴漢されて悶える変態ですからね」
「ちがう…あんっだって、仕方がないこと…ダカラ…」
「本当は痴漢とセックスしたかった？」
「はぁ…はぁ…チガウ…」
アッ…
ハァ…
ちゅぷ
もみゅ


「痴漢のチンポで犯されることを想像して自慰に耽った？」
「ソウ…デス…でも…あの時のコトを…思い出してオナニーする度にそんな自分が嫌いにナリマスッ！」

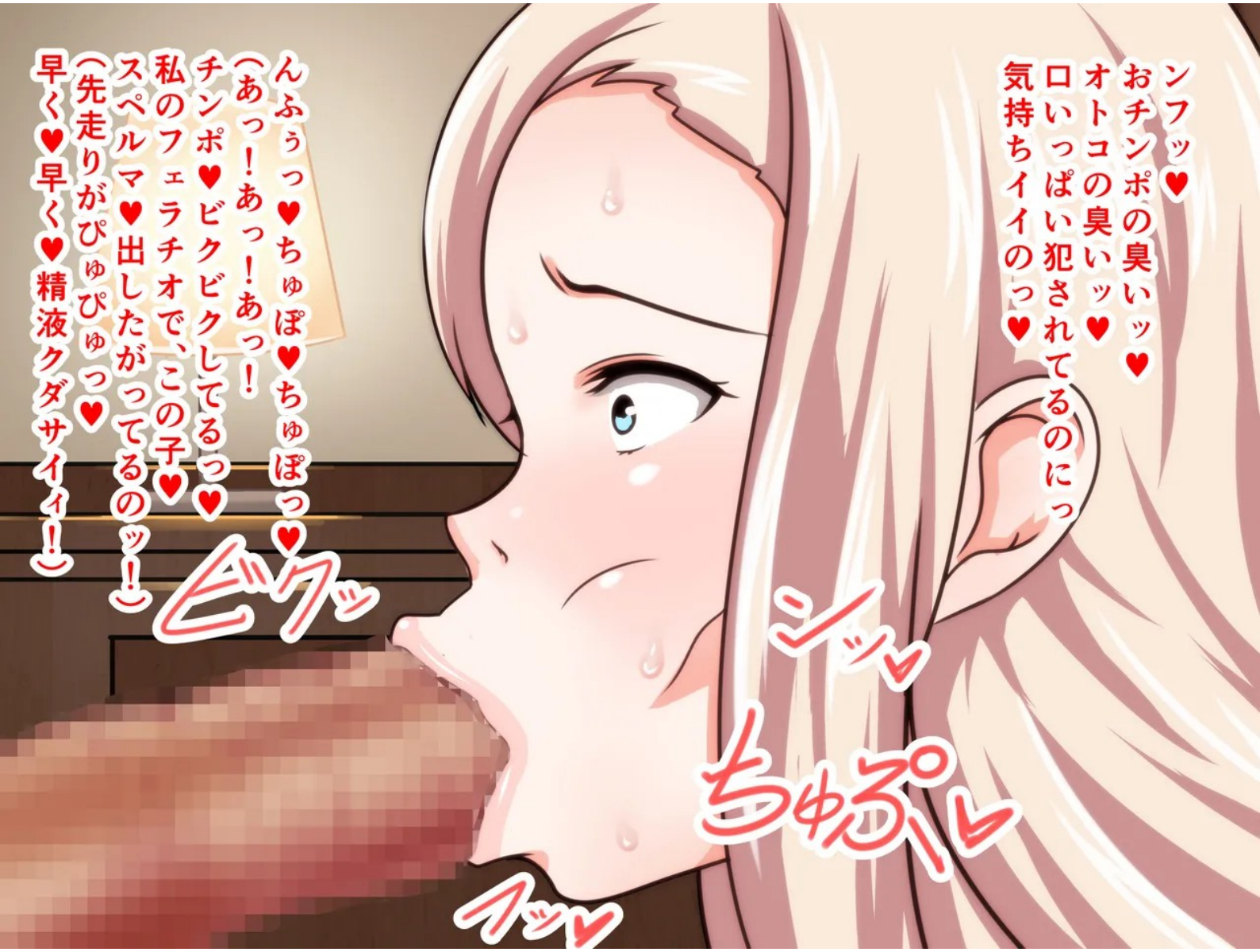

「ユーリヤ
泣くことはないよ
本当の姿を
さらけだしてごらん」
ひくっ
ウッ
ひくっ
ウッ
「夫である私になら
見せてくれるだろう？」
これでユーリヤには
夫に見えているはずだ…
女生徒で実験してきたとはいえ
「本番」は緊張する


「あ…あ…」
ユーリアの目がうつろう
「アナタ…？」
「愛しているよユーリア」
ふと、あの夫婦が
言い合っている言葉が口に出た
虚ろだったユーリアの目が
焦点を取り戻す
「はい♥　アナタ♥
私も愛してます♥」


ちゅぷ♥ちゅぷっ♥
「はぁっはぁっ気持ちイイですか？」
「いいぞ、ユーリヤ
どこでこんなこと憶えてきたんだ？」
「疲れた夫をHで
癒やすのは妻の権利♥デス♥
日本に来る前
たくさんAV見まシタ！」
催眠の影響だろうか
話し方が出会った頃に戻ったようだ
ちろっ
ハッ
ハッ
ちゅっ
もみゅ
たぷっ


「本当はずっとしゃぶりたかったんデスッ♥
チンポ♥♥」
「んふっ、すごいニオイ♥
みだらな妻で幻滅しましたか？」
「今までずっと隠してマシタッ！
…恥ずかしくて、言い出せませんデシタッ！」
「そんなことないぞ
スケベな妻で嬉しいよ」
ちゅぷ
ペロン
「んふっ、幸せデス…」
（いつもは疲れて
フニャフニャなのに、
今日のアナタは
こんなに素敵デス♥）
「これならたっぷり
愛してあげられマス♥」


ちゅぽっ♥ちゅぷ♥ちゅぽっ♥
なんて太くて逞しいのっ♥
こんなの絶対ッ♥
オマンコしたくなるッ♥
毎日おチンポして欲しいのっ♥
ちゅぷ
おしゃぶり大好きっ♥
シュ
ノーッシュ


ンフッ♥
おチンポの臭いッ♥
オトコの臭いッ♥
口いっぱい犯されてるのにっ
気持ちイイのっ♥
んふぅっ♥ちゅぽ♥ちゅぽっ♥
(あっ!あっ!あっ!
チンポ♥ビクビクしてるっ♥
私のフェラチオで、この子♥
スペルマ♥出したがってるのッ!)
(先走りがぴゅぴゅっ♥
早く♥早く♥精液クダサイィ!)
ビクッ
シッ
ちゅぷ
フッ


「んっ♥　んっ♥」
どんどん膨らんでるッ！
「うっんうううッ！」
どびゅっ♥ビュルルッ♥
んふううっ♥出たッ♥
スペルマッ♥
「うっふうッ！フッ！」
尿道に残った分まで
彼女の喉奥にぶちまける
「んふぅうう♥♥」
ユーリヤは喉を鳴らしながら
精液を飲み込んだ
美味しそうに…
ドピッ
ンーッ


「チンポ入れるからなっ
セックスするぞっ！
ユーリヤッ！」
ぬぷぷっ
「あああんっ♥
きたぁっ♥
チンポッ♥」
「あっ♥あッ♥
これ♥
欲しかったのぉ♥」
アン
ヘン
ブプ


（ようやくお前を抱けた…！）
無数のヒダがねっとりと
熱く絡みついてきて
思わず腰が引けてしまう
「アッアンッアナタッ
いつもよりスゴイのぉ♥
逞しくて素敵っ♥
奥まで届いてるのォ♥」
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


（思った以上の名器だ
兄貴じゃ秒殺されるのも仕方ないな）
「あっ♥アッあ♥」
奥いいのっ♥
子宮口がチンポとキス♥して
気持ちいいのぉ♥
こんなのっ初めてぇ♥
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


「うぉおおおッ！」
ビュルルッ！ドプッ！ドピュッ！
思いの丈を彼女に注ぎ込む！
「アッ！あああァッ!!
イッくううぅ!!!」
ビクッ
ビクッ
「んぁあああぁ♥
精子注がれてるのォ！
あぁォ！おンッ！」
ビュルッ！ビュッ！
「オッ♥…アッ♥ああ…♥」
イグゥ
なぁるぅ


彼女とベッドに横たわる
「はぁ…はぁ…
すごく…良かったの…
これからは毎日
セックスしましょうネ♪」
俺もそのつもりだ
ここで、彼女の催眠を解く

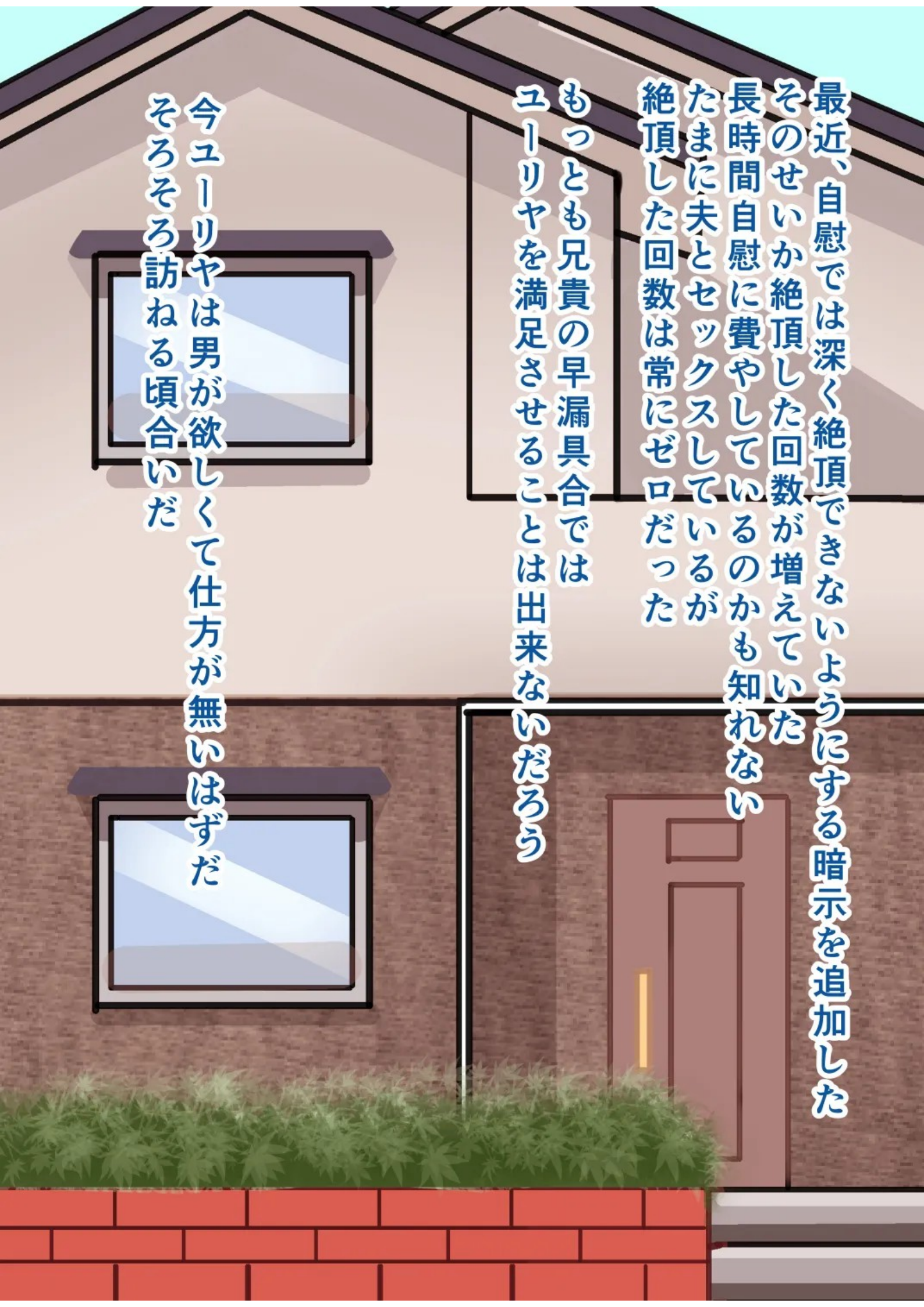

催眠をかけたことは憶えていない
彼女の中では自分から誘ったことになっている
間男に自分から積極的な
性行為をしたことだけを
憶えているはずだ
夫にもしないようなことを
「え…え…？」
「私なんてコトを…
どうかしてる…
どうして…？どうして…？」
震えながらつぶやき続ける彼女
俺とセックスを楽しんだことが余程ショックだったようだ


「ユーリヤ、君は悪くないよ
兄貴が不甲斐ないせいだ」
「言っていたじゃないか
夫とのセックスは
物足りないって
兄貴が性欲薄すぎるんだよ」
「私は…私は…」


「そう君は悪くない
長年君を満足させられ
なかった兄貴が悪い」
「夫では本当には感じたことが
無いことに罪悪感が
あったはずだ」
「君は夫は優しいと言うけれど、
君の悩みに気がつかない
そんな優しさにどんな意味が？」
ひくっ
ウッ
ひくっ


「私、自分の欲求不満のはけ口にあなたを利用したのね…」
「ごめんなさい…馬鹿みたい…私…」
「お願い、忘れて欲しいの…」
（私は…悪くない？…すごく気持ちよかったの…夫は教えてくれなかった…）
ユーリヤはあくまで自分が悪いと思い込んだようだ

ユーリヤからのメールだ
内容は
「ＮＯ
Ｙ５」
の２行のみ
１行目は夫の性交渉の有無と絶頂した回数
２行目は自慰の有無と絶頂した回数
特に意味は無いが、暗示をかけて毎日送信させている


最近、自慰では深く絶頂できないようにする暗示を追加した
そのせいか絶頂した回数が増えていた
長時間自慰に費やしているのかも知れない
たまに夫とセックスしているが
絶頂した回数は常にゼロだった
もっとも兄貴の早漏具合では
ユーリヤを満足させることは出来ないだろう
今ユーリヤは男が欲しくて仕方が無いはず
そろそろ訪ねる頃合いだ


「ダメよ…
もう二人きりで会ったらいけない…」
俺を迎えた彼女の呼吸は乱れ
赤面しており、言葉とは裏腹に
欲情しきっているのを隠せずにいた
「ダメ…
本当にダメなの…」
彼女の抵抗は弱々しく
触れた肌は熱く火照っていた
「あ…」


「あぁんっ♥はぁっ♥あんっ♥
ダメッ♥ダメッ♥あぁっ♥♥」
「本当にダメだと言うなら
家にあげなければよかったはずだっ
こうなることを期待してたんだろうっ」
「そんなっ♥違うのっあぁあっ♥」
(私っそんなこと期待してたの?)
「前戯無しで濡れてるじゃないかっ」
「違うのぉっ♥」
プルッ
プルッ
アッ♥
アッ♥
ぱんっ

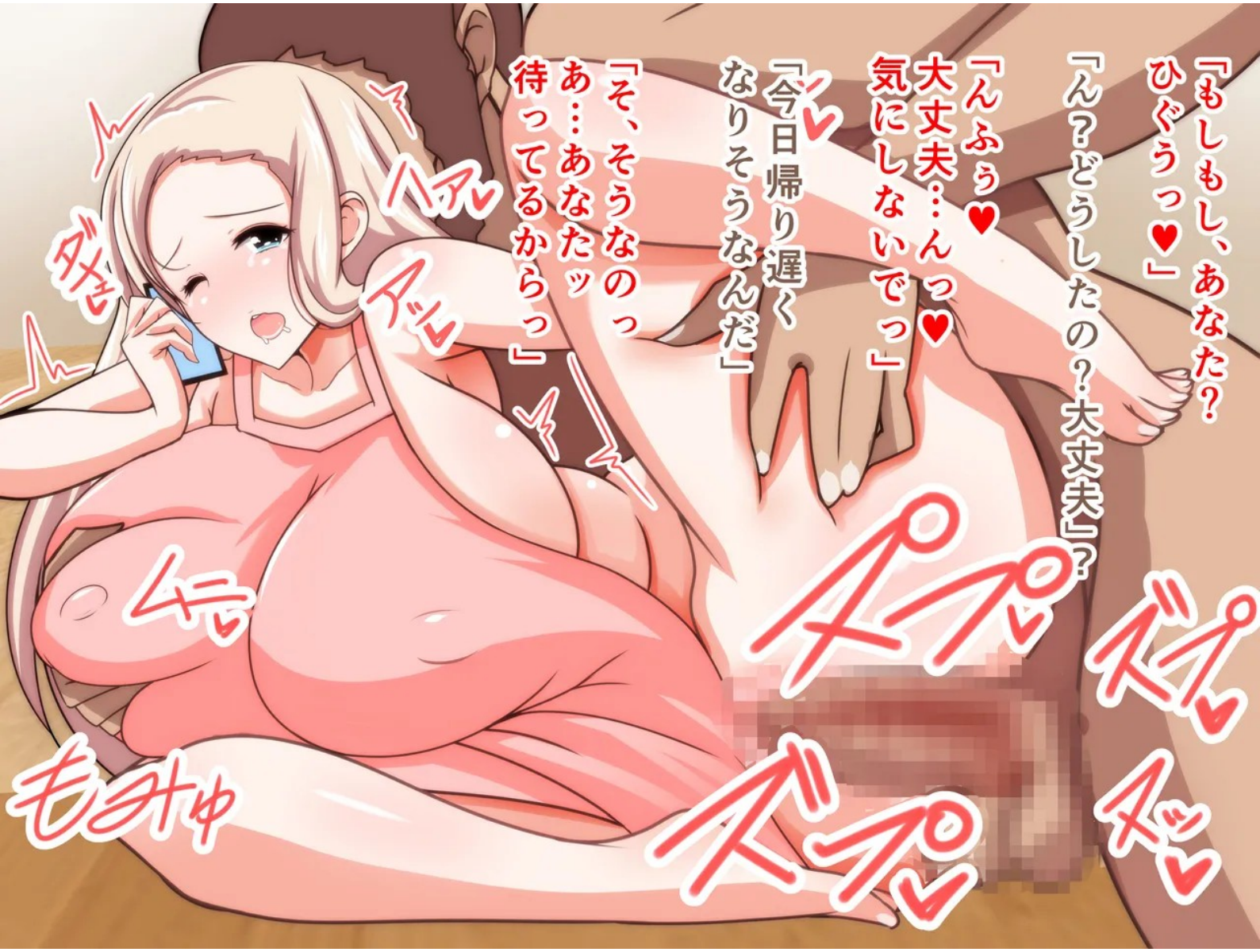

（ペニスのカタチはっきり感じちゃうっ
気持ちいいところ
ゴリゴリって、擦ってくれるのっ
夫では感じたことのないっ
奥にまでっ届いちゃうのっ）
「あああ…シッー♥
ああッ♥あっ♥」
自分が無意識に
腰を動かしてることに気がついた
夫以外のペニスを深く受け入れるように…
ぱんっぱんっ
プルッ
プルッ
アッ
アッ

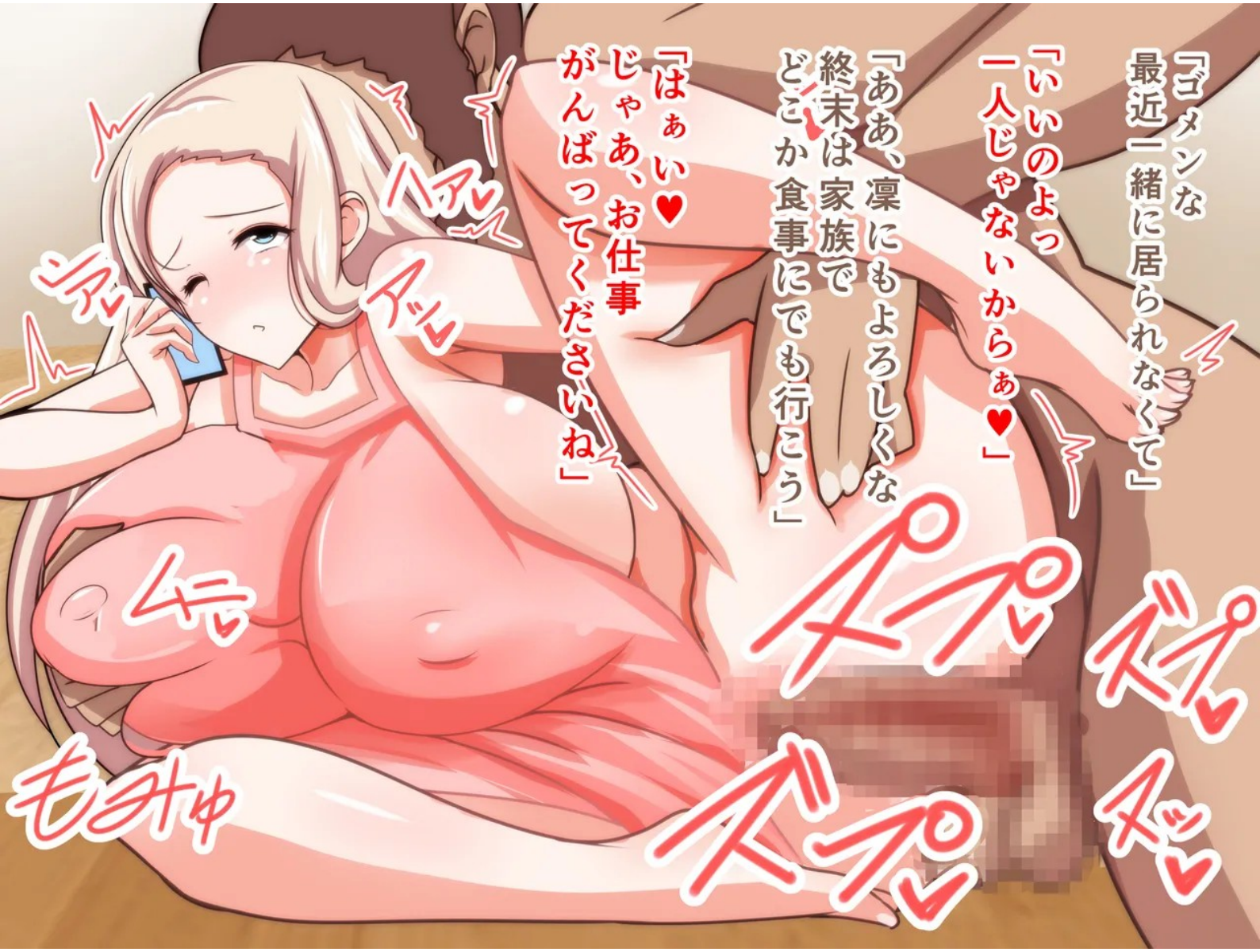

（カラダが感じてるっっ♥
夫よりも
求めちゃってるのっ♥
もっともっと気持ち良く
…なりたいのっ♥）
ぷるっ
ぷるっ
ぷんっ
アッ♥
アッ♥

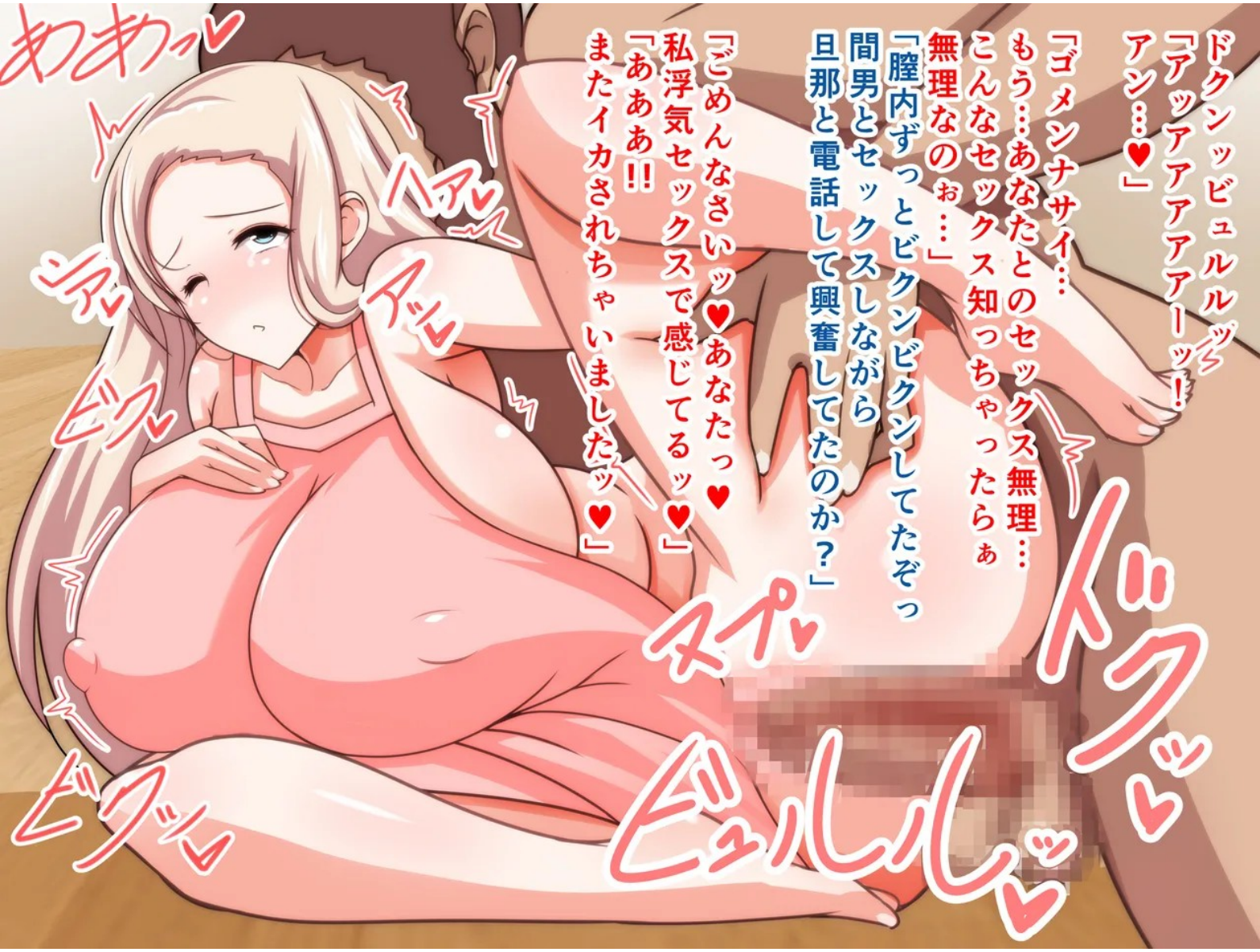
「あ…」
ドクッビュルルルッ～♥
ドクン…ドクッ…
トク…ピュルッ
プルッ
プルッ
アッ♥
アッ♥
ぁんっ


「あはっ♥あははっ♥」
突然笑い出すユーリヤ
「ああ…セックスって…」
「こんな気持ち
イイものなのね…」
イイッ
アハ
「本当…
馬鹿みたいに
気持ちよかったの♥」
催眠とセックスが
彼女の「決定的な何か」
を変えてしまったようだ


「あっあぁ♥あんっ♥ああッ♥すごひぃ♥のぉ♥」
「おっきぃ♥おチンポ♥奥で暴れてるのッ♥」
「お、電話かかってきてるぞ」
「え…？」
ハァン
アン
イッ
アッ
ズチュズプ
パン
パン


「もしもし、あなた？
ひぐうっ♥」
「ん？どうしたの？大丈夫」？
「んふぅ♥
大丈夫…んっ♥
気にしないでっ」
「今日帰り遅く
なりそうなんだ」
「そ、そうなのっ
あ…あなたッ
待ってるからっ」
ダメ
ハア
アン
ムニ
もみゅ
パン
パン
パン
パン


「ゴメンな最近一緒に居られなくて」
「いいのよっ一人じゃないからぁ♥」
「ああ、凛にもよろしくな終末は家族でどこか食事にでも行こう」
「はぁい♥じゃあ、お仕事がんばってくださいね」
ハアン
アン
ムニ
もみゅ
パン
パン
パン
パン


ドクンッビュルルッ
「アッアアアアーッ！
アン…♥」
「ゴメンナサイ…
もう…あなたとのセックス無理…
こんなセックス知っちゃったらぁ
無理なのぉ…」
「膣内ずっとビクンビクンしてたぞっ
間男とセックスしながら
旦那と電話して興奮してたのか？」
「ごめんなさいッ♥あなたっ♥
私浮気セックスで感じてるッ♥」
「あああ!!
またイカされちゃいましたッ♥」
あぁっ
ハァン
アン
ビクン
ビクン
ドクッ
ビュルルッ


「あぁんっ♥だめぇっ♥
もうっ娘が帰ってきちゃうっ」
「その時は凛も一緒に
可愛がってやるっ」
「だめぇっ
あの子彼氏いるのっ
あなたの息子とっ
祐二君とつきあってるのっ」
ぱんっ
ぱんぱんっ
ダメェ
ムニュ


「そうか、じゃあユーリヤ祐二の筆おろししてやるといい」
「祐二はいつもお前のカラダ見てるぞっお前をオカズにしてるんだっ」
「えっ？」（祐二君が私でチンポ慰めてるのっ？）
（ああ…祐二君のチンポ♥どんなカタチしてるのかしら♥）
「想像したなっ」
ダメェ
ぽんぽんぽんぽん


「あああっ！
ふぅんっ♥あんっ♥」
「おおおんっ♥」
「はいいっ若い子のチンポ♥
想像してイキましたぁ♥」
ぱんっぱんっぱんっ


「セックスの最中
他の男の事考えてイクなんて
とんでもない淫乱だなっ！」
「あんっ♥
言わないでっ♥」
アヘ♥
イクッ♥
ぱんっ
ぱんっ
ズプゥッ♥
ビュルル♥


「さっきあんなにセックスしたのに
こんなに固いの♥」
たっぷりの乳肉で
俺のチンポを挟み込むユーリヤ
愉しげにチンポを乳肉でこねくり回す
「どんどん元気になってきたわ♥
おっぱいで挟むの、好きなのね？」
くすっ
むにゅ
「このチンポ♥
本当にステキ♥」
「あんなに激しく
イッたのって初めて♥」
「ううん、私今まで
本当にイッたことなかったのぉ…」

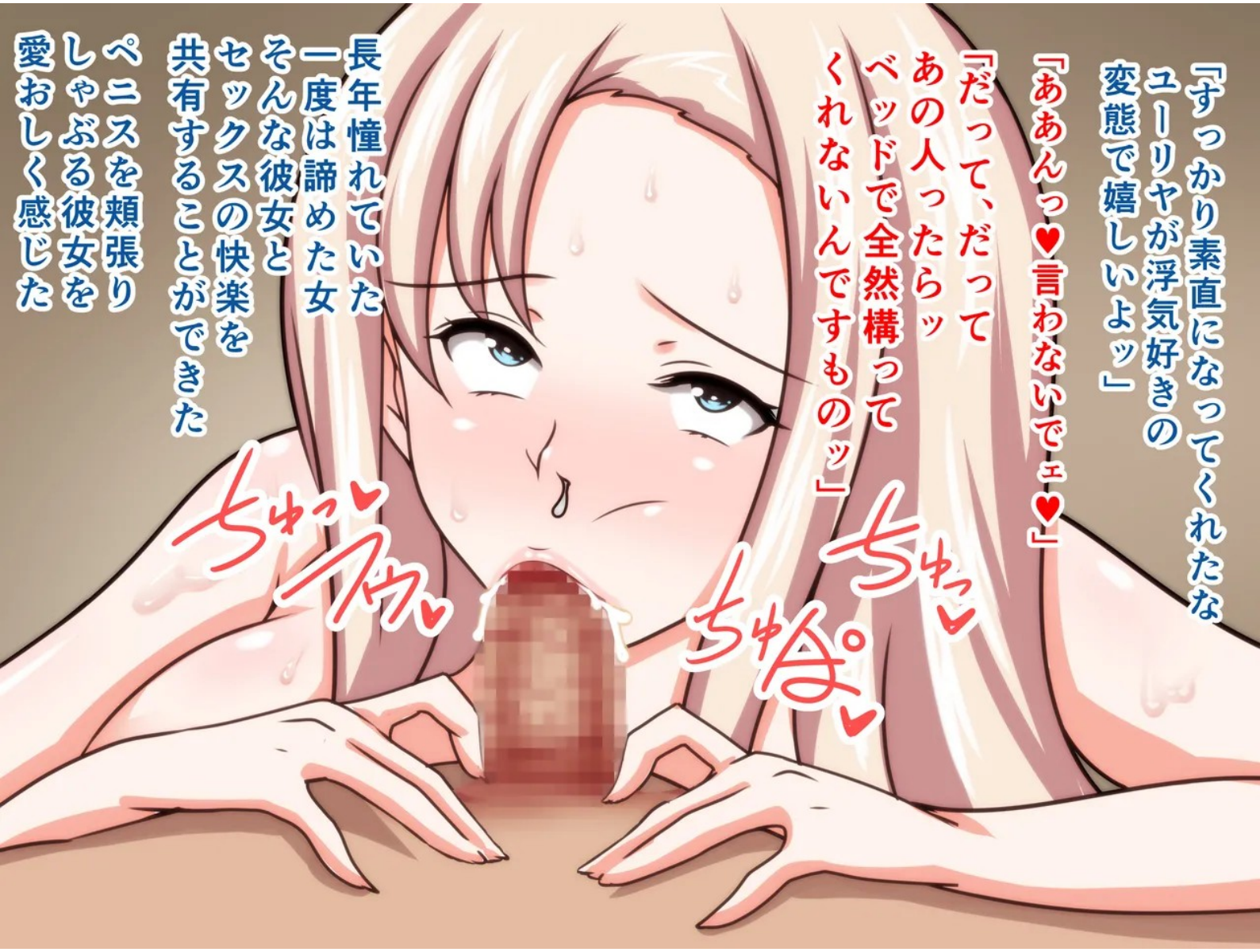

「うっ、うっおおおッ！
出るッ！出るぞッ！」
ビュクッビュクッ！
ビュルルル～ッ！
「ああんっ
びゅる♥びゅるってっ♥
射精ッ♥スゴイのっ♥♥」
「こんなに間近で
見た射精って初めて♥」
むにゅ
むにゅ
ビュルルル


俺の射精を見て
少女のように
はしゃぐユーリヤ
ずっと恋い焦がれていた女
学生時代から
ずっと抱いてきた
彼女のイメージとは違う
淫靡な性欲剥き出しの牝だった
…この彼女を知っているのは
俺だけだ！
ムニュ
なめ
ペロ
ペロ
なめ


「あぁンッ！
ダメッ♥
これっダメなのぉ♥」
「深くはいっちゃってるのッ！
こんな愛され方もあるのねッ♥」
「そうだユーリヤ
イケッ！」
アンッ
アンッ
ズポ
ズポ
ズポ
ズポ


ビュルルッ！
ドクンッ！
ドクッ！
ビクビクッ♥
「あんっ♥アッ♥あああァっ～♥」
「夫以外に愛されちゃってるッ♥
愛し合ってイッちゃってるのぉっ♥」
「ここは夫婦の寝室なのにぃ♥」
はんっ
んっ
ちゅ
ビュルルル
ビュルッ
ビュッ
ビュッ♥

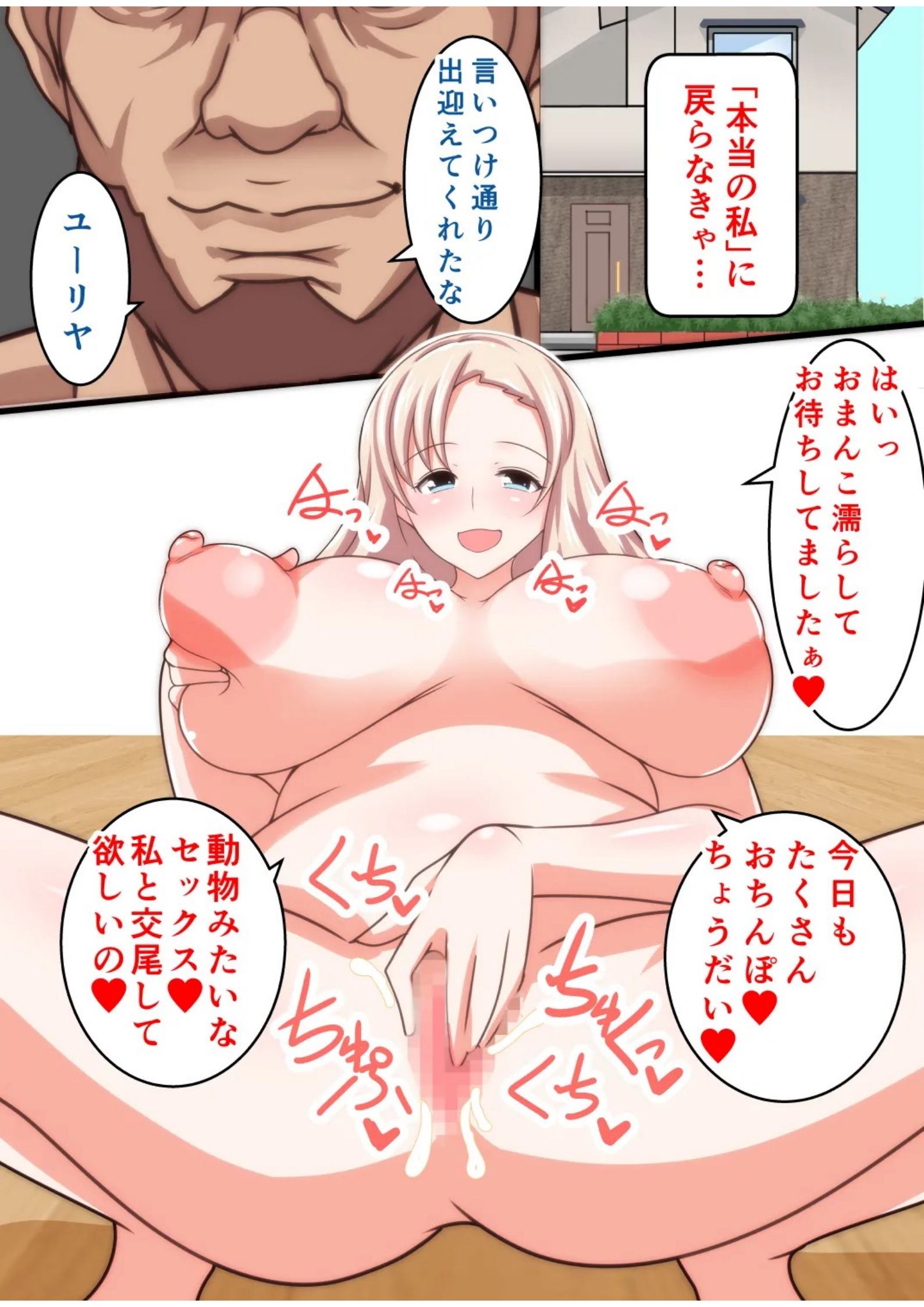

んふぅっ♥
ちゅぽっ♥ちゅぽっ♥
名残惜しそうに
チンポを舐める彼女
「ユーリヤがこんなチンポ好きの
変態だなんて知らなかったよ」
「ごめんなさぃ♥」
「本当は♥今日会った時から
勃起チンポ気になってましたァ！」
「だって、だって、
ズボンの上からでもわかるくらい
勃起してるんですものォ♥」


「すっかり素直になってくれたなユーリヤが浮気好きの変態で嬉しいよッ」
「ああんっ♥言わないでェ♥」
「だって、だってあの人ったらッベッドで全然構ってくれないんですものッ」
ちゅっ
ちゅぱ。
長年憧れていた
一度は諦めた女
そんな彼女と
セックスの快楽を
共有することができた
ペニスを頬張り
しゃぶる彼女を
愛おしく感じた


くんっくぅん…
「ああ…
このニオイ
カラダがうずくのっ」
「セックスしたくなる♥
オスのニオイ♥」
ハッ
ハッ
ちゅっ
「ねぇ♥もっと
セックスちょうだいぃ♥
セックス大好きなのぉ♥」
この様子ではしばらくは関係を
秘密にするために
また催眠が必要になるな
もみゅ
たぷ


「フン♪フン♪」
「最近ご機嫌だね」
「ここのところ
体の調子すごく良いの♪」
「それは良いことだね
スポーツでも始めたのかい？」
「う～ん、そういう
ワケじゃないんだけど…
どうしてかしら？」
（もしかすると…
あの夢のせいかしら？）
「おっと時間だ、もう出るよ」
「は～い
アナタ、いってらっしゃい♪」
フッ
ン


淫靡な夢…
欲求不満
なのかしら
あら着信
こんな曲
入れてたかしら？
プルルン
ビクッ
あ…
夢と言うには生々しい
セックスの記憶
すごくキモチイイ…
あ…ああ…
はっ
はっ
どうして
忘れてたのかしら…
あの人が…来る
お迎えしなきゃ


「本当の私」に戻らなきゃ…
言いつけ通り出迎えてくれたな
ユーリヤ
はいっ おまんこ濡らしてお待ちしてましたぁ♥
なっ
なっ
なっ
なっ
今日もたくさんおちんぽ♥ちょうだい♥
動物みたいなセックス♥私と交尾して欲しいの♥
くちゅ
ちゅぷ
ちゅぷ
くちゅ

なんか最近疲れてるのかな
夕ご飯食べた後、すぐ寝ちゃうし
今も朝ご飯食べたばかりで…
少し横になってから出かけよ…


「なに…これ…」
「さて、目が覚めたか」
「カラダは動かないだろうが
残念な知らせがある」
「凛、祐二に新しい
彼女ができたみたいだぞ」
「セックスできれば
誰でもいいみたいだな」


「…ありえない」
「私達は昔からずっと…
最近ようやく
お互い素直になれて…
通じ合えたんだから」
「それならこれを見るといい」


画面には重なり合う
二人の姿が映っていた
二人は何かに耐えるように
激しく震えていた…
「おばさんっ…
うっ…あああ…
はっはぁっ…
おばさん、ごめん
中で出ちゃった…」
ビュルビュル
ドピュ
「ふふっ、最初からそうする
つもりだったんでしょ？」
「絶対に中で出すって
腰使いだったもの♥」
プルン
プルン
アン
アン
アッ


お母さんと祐二
何を言っているんだろう
画面で起きていることを
私は理解できないでいた


「娘の彼氏の童貞貰っちゃった♥」
「娘には内緒よ？」
「はいっ誰にも言いませんっ！墓までもってきますっ！だからっ！」
「ああんっ！チンポまた固くなってるセックスしたがってるのぉ！」
パンッパンッ
プルンッ
プルンッ
アヘッ
アヘッ


「俺っ、おばさんとなら何度だってヤレますッ！」
「なんで夫以外のチンポってこんな逞しいのぉっ」
『うおおっ』
「素敵ッ！犯してっ！」
画面の向こうで狂ったように腰を振る祐一
「息子みたいに思ってたのにぃっ！子種注がれて感じちゃってるのぉっ！」
ムギュ
ムギュ
アッ
アッ


「あぁんっ♥イクッイクウッ！」
「あぁあ…♥二回目なのにすごいのぉ…っ♥」
ビュルルル
ドプッ♥
『おじさんよりうまくできてるかな？』
「うん、比べものにならないわあのひと優しいけどオトコとしては物足りない」
「チンポはね祐二君のがキモチイイの…♥」
ムギュ♥
ムギュ♥
アン
アッ


「おばさんっ好きだっ！
俺の彼女になってくれっ！」
「ああんっ♥ダメダメッ
娘を悲しませちゃうっ」
「私母親だからっ！
チンポとマンコだけの
関係がいいのぉっ♥」
（…何言ってるの？
理解できない…
理解しちゃ…
いけない…）


「コレ、なにかの間違いだから…」
「気の迷いだから…しょうがない…よ」
「このビデオは俺の家で真っ最中の生セックスライブだが次のは少し前に撮影したものだ」
別の映像が映し出される


「ああっおばさんっ
生フェラ気持ちイイっ」
「凛とはもうセックスしたの？」
「キスだけですっ
あと、たまにカラダ
触らせてくれるだけでっ」
「それじゃ
ガマンできないわよねェ」
「娘の部屋に帰る前に
タップリ射精させてあげる♥」
ハッ
ハッ
しゅぷ
しゅぷ
しゅぷ
ぷる


「おっおおおお！
あぁ～」
オッ
ハッ
ハッ
（これ、うちのトイレだ…
以前私の部屋に呼んだときに…
こんなこと…してたんだ）
「ご覧の通りお前に内緒で
前からこういう事をしていたんだ
突然の気の迷いで
セックスしてるわけじゃない」
くぷぷ
ピュン
ドピュ
ポレ


祐二は一応
あれでも息子には違いない
良い思いをさせて
やりたいという親心はある
筆おろし体験がユーリヤなら
一生の思い出になるだろう
ユーリヤを抱かせてやっているのは
もう彼女が妊娠しているからだ
そして…ユーリヤが
他の男に穢される姿を見て
激しい嫉妬と…
興奮が突き上げてくる
のを感じていた
その劣情をこの若い娘に
注ぎ込んでやるのだ
母娘共々、孕ませて…やる!!
むにゅ
むにゅ


スポ…
スポ…
（カラダ…思うように動かない…
頭もぼんやりして…）
「やめて…ねぇお願い…
私、初めてなの」
服を脱がすと母親譲りの
白い肌が露わになる
「凛、優しくはしないぞ
セックスの味を
教え込んでやるからな」
「あああッ！何コレぇっ！」
（ゴリゴリッて乱暴なのにッ）
「アッアンっ」
（私初めてなのにっ
おっきいのが入ってきてるだけでっ
気持ちイイッ）


パンッ パンッ
やはり生娘はシマリが違うなっ
（こんなモノみたいに扱われて…
優しさの欠片も無い
セックスなのにっ
私感じてるッ）
「ああーッ！」
「お願いッ止めてッ！
おかしいのっコレッ！
おかしくなっちゃうのっ！」
「もう膣で感じてるのかっ？」
「さすがユーリヤの娘だッ！
根っからの淫乱だなッ！」
あっ♥
あ～♥


パンッ
パンッ
「違うっ
わたしそんなんじゃ…」
「好きでも無い男に
惚れた男の父親に
犯されてここまでよがるかっ！」
「アアアッ！
違うのぉっ
んっんっんっ」
「フッフッ！
イクぞっ！
膣に出すからなっ」
「ダメダメッ！
お願いっ中ダメッ！
外にっ！」
ビクッ
くっ


ドビュルビュル
「ウッ！オオオ…」
「アッアアアッー！
ナニッコレッ…
あっアア…あっあああ…」
（熱いのがっ流れ込んでっ
嘘ッウソッ私のカラダがッ
あんっ私の子宮が
悦んじゃってるっ）
「これが私の初めての…
セックス…
祐二…バカ…」
アヘ
アヘ


二時間後
「もうっわかったからぁ
やめてぇ…」
「セックス♥いやぁ…♥
あんっ♥アッ♥」
「ユーリヤ達は
まだヤッてるな
俺たちも愉しもうな♪」
（スゴイッ♥
深くまで入っちゃってるっ♥
奥ごんごんっ♥
てされてるのぉっ♥）


「分かってないだろうがっ！」
パンパンパンッ！
「アッアアアアーッ！」
「イグッ！イってますっ！
おじさんのチンポでッ♥
イッてますからぁっ♥」
「初物はいいもんだっ！」
（どうしてっ!?
体が熱くてッ！
イクの止まらないッ）！


（レイプなのにっ
愛情なんてないのにっ）
（なのにっ
なんでこんなに）
「キモチいいのぉ♥」
「んぁあッまたイクッ♥
イクイクッ♥
あああああっ♥」
ビクッ
プル
パンッ
ビュッ
ビュープープ


「良かったぞ凛
どうだオンナになった感想は？」
（私…イッたんだ…
おじさんの精液熱くて…
頭真っ白になって…）
（自分のカラダが
こんなになるなんて…
知らなかった…）
（知りたくなかったのに…）
はっ
はっ
はっ
ドロッ


「凛、これでお前は俺の女だ」
「はい…私は…おじさんのオンナ…」
《もう…祐二の…カノジョじゃないんだ…》
ちゅぷ
ん
ギュ

翌日、私は学校を休んで
おじさんが来るのを待った

（おじさんと向かい合っただけで
カラダはもう火照って…
私セックス期待してる…）

「教えたとおり
ちゃんとおねだりするんだ」

「はい…お…
おチンポ…ください
おじさんのおチンポで♥
犯してくださいっ」




（おじさんとのキス…
祐二とは違う…
ねっとりと舌を絡ませたり
口の中をあちこち
探るようにしてくる…）
ちゅ
ん…
（胸を強く揉む
おじさんの手が熱くて…
気持ちイイ…♥）
（知らなかったことを
教えてくれる…
おじさんが私を
オトナの女に…してくれる…）
むにゅ


「おおお…
前戯もナシで
こんな濡らしやがって」
「セックス
覚えたてのくせに
発情期の雌犬
並みじゃねぇかっ」
ああんっ♥
違うのぉっ♥
たぷ
たぷ
ずぷ
ずぷ


「あぁーッ♥
スゴイっコレッ
イクッ♥イクッ♥
イクッ♥」
ビクッ
オンアン
ビクッ
ビクッ
プルン
プルン
「この歳でこんな
オッパイ揺らすか普通ッ！」
「母娘揃って下品な
乳しやがって！」


「あうあっ♥おおっ♥おおんっ♥
あああああッ♥♥」
「ぐうぅぅッ
ガキの癖に
搾り取りやがるっ」
「精子の味ッ
もう憶えやがったッ！」
「ひっひくっ…
アタシのカラダっ
おかしくッ
なっちゃった…」
ぐぽ
ぐぽ
ぐぽ


「はっはぁっんっ
ああっ怖いのっ」
「おじさんお願いっ
優しくして欲しいの…」
「怖いくらい
感じちゃってるっ」
「おじさんっ
気持ちよすぎてっ
怖いのぉっ」


「何も考えるなっ
全部俺に任せて
マンコにだけ集中してろっ」
「はひいっ♥
おまかせっ♥セックス♥
おマンコ♥おあずけしますっ♥」
「はっはっ♥
あっおっ♥」
「おまんこズポズポ
犯されて悦んじゃってるぅ♥」
パン
パン
ブルッ
たぷん
ぷるん
ぷるん
ズポ


ドクンッドプッ
ビュルルルッ～
「んあああぁっ♥
おまんこ♥
キモチイイのぉおっ♥」
アン
ビクッ
ビクッ
パンッ
パン
ブルッ
ぷるんっ
とぴゅ
とぴゅ
「ああ…♥
中にでてるよぉ…♥」
（生セックス…コレ
…赤ちゃんできちゃうヤツだ…）


「お互いカラダが
大分馴染んだな
もう完全に俺のオンナだ」
「そうなのっ？
私のカラダおじさんに
変えられちゃってるのっ？」
ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥〜
ビンッ
ビクッ


「とぼけるなよっ
わからせてやるっ」
「アッ♥
あああああっ♥」
「感じてますっ♥
おじさんのおチンポッ♥」
「まんこで感じて♥
イっちゃってますからぁっ♥」


ドクンッビュルルッ
「んあああっ
あああーッ
アア…♥」
ビクビクッ
ビクンッ
ビュッ
ビュッビュッ
（こんな気持ちイイのっ♥
セックス毎日して…
満たされちゃってる…♥
私もう、おじさんから
離れられない…♥）


ちろちろっ♥ぺろっ♥
ちゅっ♥れろおっ♥
「おじさん気持ちいい？」
ちゅっ♥ちゅぱっ♥
ちゅっ♥
「んふぅ～♥お掃除フェラいかがですか？」
ちろ
ぺちゃ
ちゅぷ


ちゅぷっ♥
ジュポ♥ジュプ♥
ちゅるるっ♥
「あっお母さん
ずるいっ
私もぉ…♥」
「いい凛？
フェラチオはね
こうやって唇で…」
んちゅ♥ちゅぷ♥
ちゅぽ♥ちゅぽ♥
んっ
じゅぷじゅぽっ


「はい、凛の番よ♥」
ぬちゅ♥ぬちゅ♥
ちゅぷっ♥
ぬぷっ♥
「んふぅ♥
おじさんのちんぽ♥
大好きぃ♥
んんんっ♥」
「ふふっ良い調子♥
凛もすっかり
このチンポに夢中ね♪」
ビュルルッ


「精液濃くてぷるっぷるなのぉ…♥ひゅごいよぉ…♥んっこくっ」
「お掃除でこんなに沢山精子だしちゃうなんてふふっ凛のお口気持ちよかったのね♥」
アン♥
ちゅっ♥
たぷ♥
プルン♥


兄貴の会社のオーナーと共謀した結果
兄貴は長期の海外出張に出かけることになった
「兄貴、家族のことは任せてくれ」
「お前にも色々面倒かけて済まないな
家族のことを頼む」
これでいつでも二人を抱くことが出来る
兄貴に今の二人の姿を生で見せてやれないのは残念だ


「ずっと欲しくてたまらなかったのぉ♥
安定期に入るまでおあずけだったからぁ♥」
「俺もずっとガマンしてたからなっ
たっぷり可愛がってやるっ」
アンッ
はぁン
ぱんっ
ぱんっぱん


「んぁあっ♥嬉しいっ♥」
「おっ♥おっ♥おおおっ♥」
「イクッ♥いくうぅぅっ♥」
「赤ちゃんにアクメッ♥伝わっちゃってるぅぅ♥♥」
アンッ
ぱんっ
ぱんっ


「ねぇ母乳でるようになったよ♥」
「おじさまが私をこんなカラダにしたんだからね♥」
「ミルク絞られて♥Hな気分に♥なっちゃうの♥」
「んっ♥ふうっ♥」
「おじさま♥アソコも可愛がって♥ずっとおあずけで切ないのっ♥」
あん
んふん
プシュン
ピュン
もみゅん
もみゅん


「はぁっはぁっ
コレッ
チンポ♥欲しくて
たまらなかったのっ♥」
アッ
ハンッ♥
「んあぁっ♥
んぉっ♥」
「ボテ腹姿でスケベな
腰使いしやがって」
「だってぇ♥
キモチいいんだもんっ♥」
たんっ
たんっ
たんっ


「ママになるのってキモチイイッ♥おじさまとのセックス幸せなのぉ♥」
ハンッ♥
アッ♥
たんっ
たんっ
たんっ
「イクイクッ♥イクッ♥ウウウッ～ッ♥あぁっ♥アアアアッーッ♥」


凛が「おじさま」と呼び始めた頃
ユーリヤが「ご主人さま」と呼ぶようになった
娘に対してどこか一歩引いているのかもしれない
「おじさま♥
気持ち良いですか？」
「ご主人さま♥
いつでも射精してくださいね♥」
むにゅ
むぎゅ


もちろん、二人とも
可愛がるつもりだ
「ふふっ♥
本当におっぱい好きなんですね♥
もうビクビク♥
限界みたいです♥」
くすっ
アン
ビクン
ビクン


母娘に奉仕されるのは最高だっ
「あん♥」
「きゃっ♥」
ご主人さま♥逞しい射精♥ありがとうございます♥ニオイだけでまた妊娠しちゃいそう♥
ドピュ ビュル
ドクン ドクン


「もうっお母さん…
そんな気持ちよさそうにしてたら…
私ガマンできないよ…」
「んっ♥あっ♥あああ♥
子宮口こんこんって♥
気持ちイイのっ♥」
「あっ♥んっ♥
あっ♥あっ♥」
「んはぁ♥
娘に見られながらイクッ♥」
トン
トン


「はっ♥はっ♥
おじさまぁ♥
子宮突き上げてっ♥
あああんっ♥」
「赤ちゃんの部屋♥
トントンって♥」
「ふふっ
大きなお腹のHな新婦ママ♪
可愛いわ♥」
トンッ
トンッ


「あああっ♥イクゥゥ♥」
「妊娠してるのにぃっ♥
お腹に赤ちゃんいるのにぃっ♥」
「やらしいママで
ごめんなさいぃ♥」
「ママのアクメで、赤ちゃん驚いちゃうかしら♥」
ドク、
ドク、


仕事に忙殺されていたのと
時差もあるので、ここのところ電話での連絡も滞っていた
しかし、帰れば新設部署を任せてもらえる
妻も喜んでくれるだろう
家族に会えない寂しさを
仕事に打ち込むことで紛らわせていた
そんな折りに、弟が家族のＤＶＤを送ってくれた
ん？これは寝室？


「ごめんなさいアナタ
今、私、ご主人さまに
可愛がられてますっ♥」
…なんだ…これ
「凛も一緒なのよっ
私達、幸せなのっ♥」


「兄弟なのにここまでオスとしての性能が違うなんて思わなかった」
「夫はセックスで選べば良かったんだわアナタを選んだのは、間違いだったのっ！」
「だからこれから…アナタの弟の赤ちゃん産みます凛も一緒に妊娠したのっ」
んふっちゅぽ
はぁい
れろれろ


「パパ心配しないで、私ちゃんと産めるから」
「おじいちゃんになるんだよ
あれ、パパの弟の子供だから
甥か、姪になるのかな？」
「私は…娘の幸せのために
愛人でガマンするわっ
でも赤ちゃんもう一人欲しいかしら♥」


「遠い異国で頑張ってるアナタ
もう私は慰めてあげられないけど」
「このビデオで
ちっちゃいおチンポ
シコシコしてね♪
きっと元気出るわ♥」
ちゅぽ
はぁ
はぁ

「愛して…たわ
さようなら」

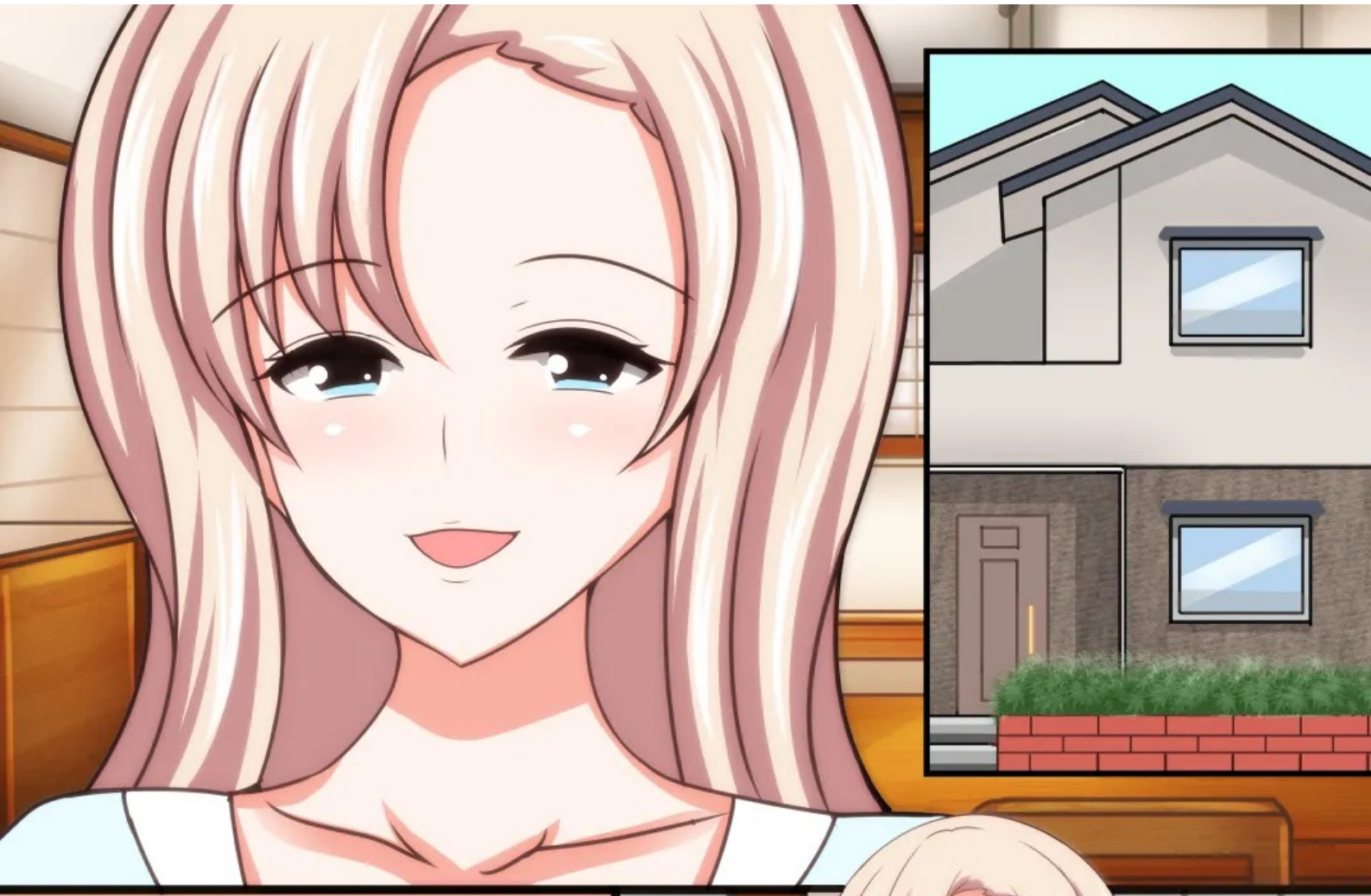







イヤァ
むにゅ
むに
アッ
イヤン
くちゅ
くちっ
ニコ
ニコ


























たぷんっ


ハァ…
ハァ…
もみゅ
もみゅ


ア…
ン…
フッ…
ハァ…
ピクン
ちゅっ
もみ




ひくっ
ウッ
ウッ
ひくっ





















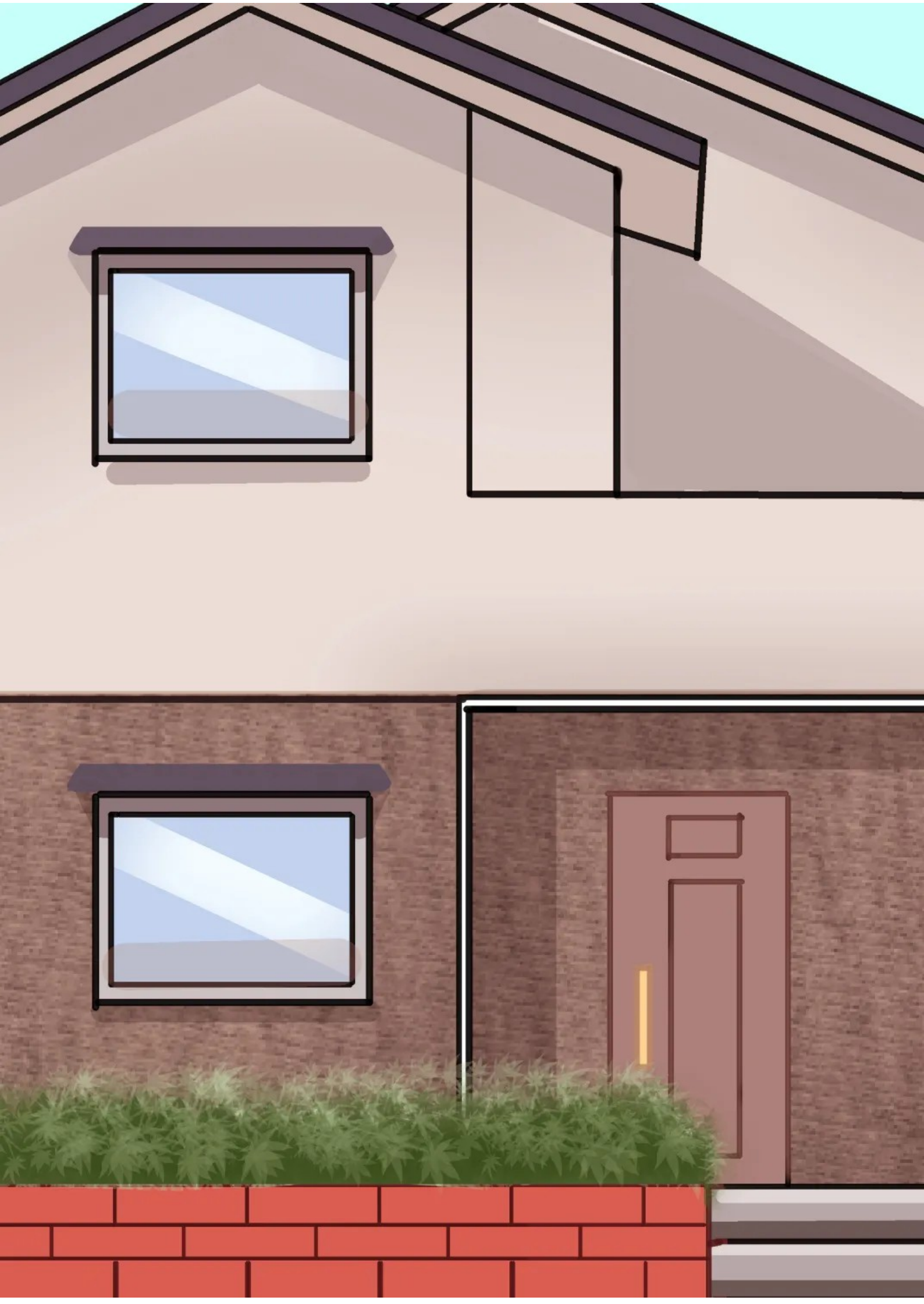





























ダメッ
ぬっ
ぬっ
ムニュ
ぬんぬん
ぬんぬん


アン
アン
ビクッ
ムニュ
プルン
ぷるんぷるん



























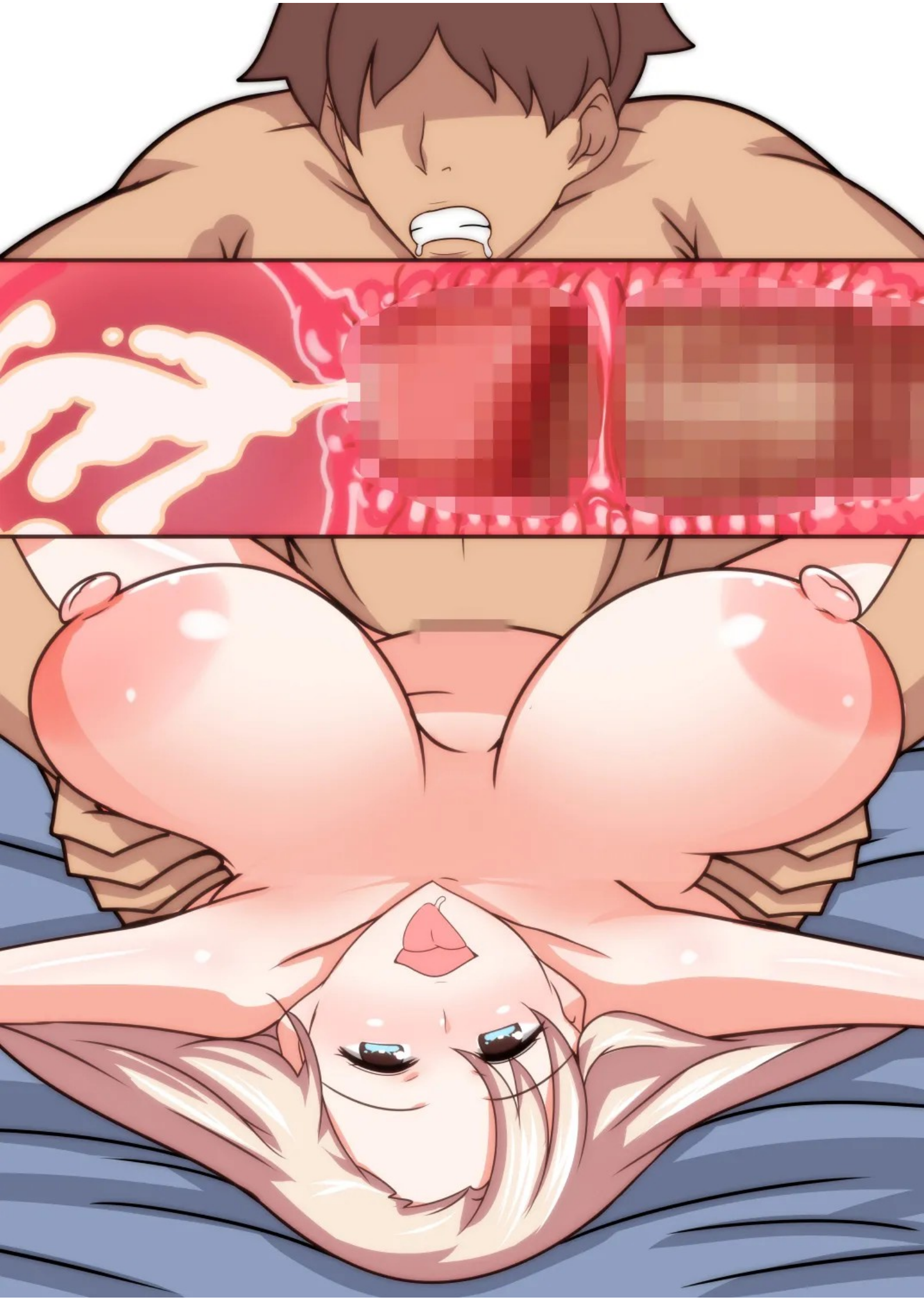





















































はぁ
ハッ
たぷっ
たぷん
ブルン
ブルンッ
ポンッ
ポン
ポン
ズポ




























ハンッ
アッ
たんっ
たんっ
たんっ
たんっ





















